

## 初めに

この度は貢ぎマゾ募金【Dominated Devotion】をお手に取っていただき誠にありがとうございます。

以下は脚本が完成してしばらく経った2022年の夏ごろに書いたものです。どのようにして彼女たちが貢ぎマゾ募金というアイデアに至ったのかその足跡を想像で書き綴ったものです。なぜ僕はこのようなものを書いたのでしょうか？それは多分、単なる創作的好奇心だけでなく、彼女たちの存在と幸せができる限り続いて欲しかったからだと思います。

読み方はこれまで何度か出た読み方と一緒に「」が光ちゃん、『』が萌ちゃんの言葉です。

日常的な会話がダラダラ続くような感じになってますので、身構えず食後の一服のような気分で読んでいただけるとよいのではないかと思います。

最後にこのような仔細なる箇所まで作品をご覧いただいたこと、心より深謝申し上げます。

またお目にかかれる日を楽しみにしております。

それではエピローグをご堪能下さい。

---

## エピローグ：茜色

～休み時間、廊下にて～

「おかねーおかねーせちがれえー」

『突然なんですかーw光ちゃん』

「いやさーお金欲しくなーい？」

『うーん...萌は言えくれますからねー？あんまりですねー？』

「くぅー！金持ちめ！金くれ！かねー！」

『いいですよー♪いくらほしいですかー？』

「もえもえイヤミーなりきーん！！」

『嫌味じゃないですよー♥大好きな光ちゃんが困ってるなら助けたいじゃないですかー♥』

「...もえもえってさ...」

『？』

「...もえもえってときおりど真ん中にデッドボールぶん投げてくるときあるよね...」

『?...なんですかーwwwそれwww萌よく分かんないですーwwwデッドボールってなんですかーw』

「そっからかい！」

『どういう意味ですかー？♥』

「んにゃ！とにかく聞いているこっちが恥ずかしくなることをずばん！と言うよねってこと！！！」

『あーそういうことでしたかー♥光ちゃん今の恥ずかしかったんですかー♥どうしてですかー♥』

にやけながらじりじり距離を詰める萌ちゃん。のけぞる光ちゃん。

「うっ...」

『どうしてなんですかー♥教えてくださいよー♥』

「もえもえのいじわるー；；」

『教えてくれない光ちゃんもいじわるじゃないですかー♥お金あげませんよー♥』

「うちはもえもえからはもらいたくないの！！もらうと友達じゃなくなっちゃうじゃん！」

『んー？萌は友達だからあげるんですよー♥いいじゃないですかー♥』

「もえもえがよくてもうちがダメなの！！むし...」

『むし...？』

「いやー今のなーし！なんでもなーい！」

『ふふwww変な光ちゃんw』

「変言うなー！とにかくうちはもえもえじゃないどーでもいい人からお金もらいたいのー！そっちのほうが好きに使えるの！！！」

『そういうものですかねー？』

「もえもえは無頓着すぎなのー！たとえばうちがもえもえからもらったお金で彼氏に貢いでたらショックっしょ？」

『えー♥彼氏いるんですかー♥』

にやつく萌ちゃん。

「たとえば！そっちの話じゃない！」

必死に話を逸らそうとする光ちゃん。

『えー♥そっちのほうに気になるじゃないですかー♥』

「んじゃない！いないっていない！だから例えばにしたの！はい！これで満足？！」

『ぶー不満ですー♥』

「もう知るか！とにかくもえもえのお金をうちが彼氏に貢いでたらがっかりするでしょ？友達やめたくなるでしょ？」

『んーどうでしょうかねー？そんなことないと思いますよ♥』

「だってもえもえ、うちにいいように使われてるんだよ？お財布扱いされてるんだよ？」

『でも光ちゃんですし...萌は光ちゃんのためにあげてるので光ちゃんがいいと思ったならしいと思いますよ♥』

「信頼が重すぎる！刷込み済みのひよこぐらい信頼が重いよ！」

『萌ひよこじゃないですよーwww』

「知ってる！例え！」

『あっ...でも幼稚園入ったときはひよこ組でしたねー♥』

「知るか！ひよこから離れてー！」

『その次はうさぎ組でしたよー♥』

「年またいだ！？」

『それでー♥次はー...♥』

「もえもえ許してー；；うちが悪かったー；；」

『？よくわからないですけど光ちゃんなら許してあげますよー♥』

「ありがとー♪もえもえー♥」

『どういたしましてです♥』

「もえもえー♥」

光ちゃん、萌ちゃんの腰に手をまわし勢いよく抱き着き、おっぱいに顔をうずめる。

萌ちゃん、ほほえみながら抱擁。ぴょんぴょん可愛らしく飛び跳ねる光ちゃんのサイドテールをやさしくなでなで。

『ふふ♥いい子いい子♥』

「もえもえー♥」

『なんですかぁ〜♥ちゅーしますー♥』

「するー♥」

「『んー♥』」

「...はっ！」

『？』

「いけないいけない...もえもえの雰囲気のにのまれるとこだった...」

『飲まれるとこだったんですかー♥残念ですー♥』

「んもう！なんの話してたかわかんなくなっちゃったじゃん！」

『とにかく光ちゃんはお金がほしいんですよ〜♥』

「そうそうどっかの誰かがただでお金くんないかなー」

『ですから萌がー』

「そうじゃなくてうちとは関係のない人から無責任にほしいの」

『円光ですか？』

「やだ！リスク高い！」

『パパ活ですか？』

「リスクは低いけど時間かかるしもえもえと遊ぶ時間が減るのやだ！」

『それは萌もいやですねー』

「なーんかこうもっと楽に、うちが苦労しないようにしたいんだよねー」

『それってぼーっと立ってるだけってことですかー？』

「それはそれで長いと退屈だし疲れるけどまーそれでだけでお金いっぱいもらえるならいいよねー」

『だったら駅前の人たち真似したらいいんじゃないですかー？』

「は？」

『募金おねがいしまーすって毎日言ってる人いるじゃないですかー♥あれ立ってるだけでお金もらえて楽じゃないですかー♥』

「ほう...いやでもあれもあれでかなりめんどそーだけど...でも募金...そっかー募金かぁ...もえもえいいこと言うねー♥」

『？』

「募金してもらえばいいんだ♪」

『駅の人にですか？』

「うーん♥その中でもうちが大好きな人に」

『やっぱり好きな人いるじゃないですかー♥』

「違うわ！うちは興味ないけどうちらみたいJKに興味がある人からお金を募るの♪」

『パパ活じゃないんですかー？』

「あれよりなにもしない♪お金だけ払わす貢がせて募金させる♪」

『そんな人いるんですかー？』

「いるいるいっぱいいるって♪JK見学するだけでお金払っちゃう人がいるんだから絶対いる♪」

『ほんとですかねえ？』

「じゃあもえもえと一緒にやろ♪ってかももえいた方が絶対食いつく！」

『そうなんですかー？萌は光ちゃんと一緒なら全然いいですよー♥』

「よーしけってーい♪帰りにさっそくやってみよ♪もえもえー♪」

『りょーかいでーす♥それにしても光ちゃんはすごいですねえ♥萌全然思いつきませんでしたよー♥』

「うちだって思いついたのはもえもえのおかげだよ♪もえもえすごーい♪」

「『えへへへ♥』」

『光ちゃん♥』

「ん？」

『放課後ってずっと続くといいですよねえ〜♥』

「？もえもえ今休み時間、授業まだあるよ？」

『放課後ですよ〜♥萌にとって光ちゃんと一緒にいる時間が放課後なんです♪』

「？ますますわからん？どういうこっちゃ？」

『えへへ〜♥萌もわかりませ〜ん♥』

「wwwなんじゃそりゃw」

『でも光ちゃんといると休み時間でも放課後って気がするんです♥授業のこととか宿題のこととか学校のこととか忘れちゃうんですよ♥』

「マ？うちの評価高くない？」

『マジです♥だからそんな時間がずっと続けばいいなーって思ったんです♥』

「やっぱりもえもえって恥ずかしいこと何食わぬ顔で放り込む癖あるよね？」

『そうですかー？』

「そうなの！」

『いやですかー♥』

「ううん♥うちももえもえという時間を増やしたいし続けたい♥続けてこ♥もえもえ♥」

『はい♥楽しい放課後にしましょうね♥光ちゃん♥』

「当然♥」

聴き慣れたチャイムが鳴り響く。

「ってなわけで放課後うちの席に来てねー♥もえもえー♥」

『はい♥』

忙しく仲良く浮足立たせながら戻る二人、いつもより少しだけチャイムが長く、永遠に触れたような、そんな気がした。